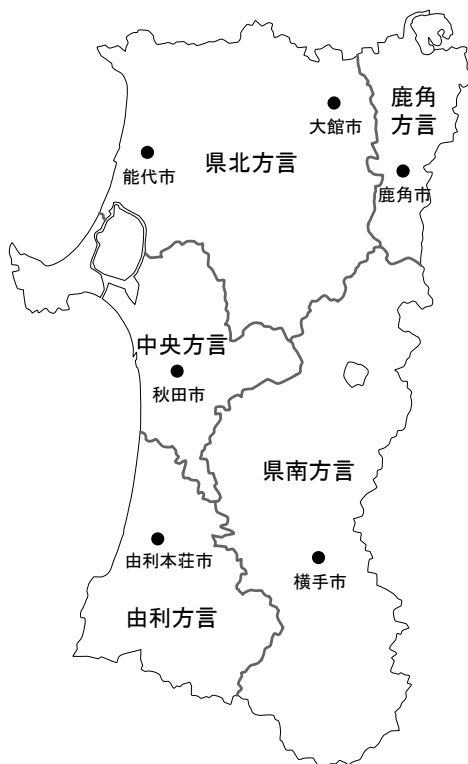


秋田県由利本荘市本荘方言



秋田県方言区画図

【秋田県の方言区画】秋田県の方言は、青森県津軽方言と連続的な県北方言と、岩手県南部の方言と連続的な県南方言とで異なる特徴をもつ。ただしその境界線は一本に収斂するものではなく、秋田市を含む中央方言域が両者の特徴の混在する緩衝地帯となっている。方言区画は便宜的に「県北方言」「中央方言」「県南方言」に区分されるが、三者の関係は移行的に連続するものと見てよい。一方、かつての藩領時代に、青森県東部域・岩手県中北部域とともに南部藩に属していた鹿角（かづの）地方、亀田藩・本荘藩・矢島藩・仁賀保氏領・天領に五分され、隣接する山形県庄内地方との関係が深い由利地方は、秋田藩域に含まれる県北方言、中央方言、県南方言から切り離して、鹿角方言、由利方言として特立し得る特徴をもつ。

【本荘方言について】秋田県由利地方（由利本荘市、にかほ市）は、古くから山形県庄内地方とのむすび

つきが強く、ことばの面でも、庄内方言と共通する特徴を多くもつ。たとえば、庄内・由利方言では、推量の「だろう」に当たる表現が「デロ」となるが、これは、東北地方の大部分の方言が「べ」を使うのと同線を画する。由利本荘市の本荘地区は、近世より本荘藩の城下町として発展した地域で、現在もこの地域の中心地である。

【表記について】本荘方言の表記にあたり、次の基準を設けた。

「イ」と「エ」の中間音を「エ」（音素表記では/e/）で表す。

「シ/ス」[sɨ]、「ジ/ズ」[zɨ]、「チ/ツ」[tɕi]をそれぞれ「シ」/si/、「ジ」/zi/、「チ」/ci/で表す。このため、「出す」「立つ」などの動詞は非過去形を「ダシ」「タチ」と表記することになり、表記の上ではイ段形と同形になるが、これは非過去形とイ段形が機能的に等価であることを意味するものではない。

連母音 /ai/・/ae/ の融合音 [ɛ] を工列音の仮名に小字体の「ア」を付して示す。

有声母音に挟まれたカ・タ行音は濁音化したが、こうした音声的環境によって生じる濁音の表記は、語形を提示する際（活用表中など）では行わない。例文中では通常の濁音表記を行う。文献からの引用例文中では、原典の表記にしたがう。

本来の濁音は語頭以外では鼻濁音（ガ行は ɲ-, ダ・ザ・バ行は入り渡り鼻音を伴う音声）で発音されるが、通常の濁音表記を行う。

【調査概要】本稿の記述は、基本的に由利本荘市本荘地区（日本荘市市街地）に生育した高年層話者への聞き取り調査をもとに行っている。用例は、昔話資料、辞典等から引用した（用例出典参照）。引用元の記載のないものは、聞き取り調査の際に確認した例文である。

秋田県由利本荘市本荘方言の活用表

《動詞》

活用形		類別			
		a類 書く	b類 見る	来る	する
終 止 類	断定非過去	カク	ミル	クル	シル シ
	断定過去	カエタ	ミタ	キタ	シタ
	命令	カケ	ミレ	コエ	シェ
	禁止	カクナ	ミンナ	クンナ	シンナ シナ
	意志	カコ(ー)	ミロ(ー)	コロ(ー)	シロ(ー) ソ(ー)
	推量	カクデロ	ミルデロ	クルデロ	シルデロ シデロ
接 続 類	連体非過去	カク	ミル	クル	シル シ
	連体過去	カエタ	ミタ	キタ	シタ
	中止	カエテ	ミテ	キテ	シテ
	仮定	カケバ カエタラ	ミレバ ミタラ	コエバ キタラ	シェバ シタラ
	継起	カエタバ カエタツケ	ミタバ ミタツケ	キタバ キタツケ	シタバ シタツケ
派 生 類	否定	カカネア	ミネア	コネア	サネア
	丁寧	カクシ カキアンシ	ミルシ ミアンシ	クルシ キアンシ	シルシ シシ シアンシ
	使役	カカシエル	ミサシエル ミラシエル	コサシエル コラシエル	サシエル
	受身	カカエル	ミラエル	コラエル	サエル
	可能肯定	カケル カク(ニ)エー	ミレル ミル(ニ)エー	コレル クル(ニ)エー	シェル シル(ニ)エー シ(ニ)エー
	可能否定	カケネア カカエネア	ミレネア ミラエネア	コレネア コラエネア	シェネア サエネア
	自発	カカル	ミラル	コラル	サル
	尊敬	(該当形 欠)	(該当形 欠)	(該当形 欠)	(該当形 欠)
	継続	カエテル	ミテル	キテル	シテル
	希望	カキテア	ミテア	キテア	シテア
	のだ	カクンダ カクナダ	ミルンダ ミルナダ	クルンダ クルナダ	シルンダ シンダ シルナダ シナダ

a 類動詞の基幹音便形

語幹末子音	語例	活用形例(過去形)	作り方
k	書く kak・u	カエ-タ	kをeにする。「行く」ek・uはkをQ(促音)にし「エツ-タ」。
g	嗅ぐ kag・u	カエ-ダ	gをeにする。-タが-ダになる。
s	出す das・i	ダシ-タ	音便形をとらず、基幹イ段形を用いる。
t	立つ tac・i	タツ-タ	tをQ(促音)にする。
n	死ぬ sin・u	シン-ダ	nをN(撥音)にする。-タが-ダになる。
b	飛ぶ tob・u	トン-ダ	bをN(撥音)にする。-タが-ダになる。
m	飲む nom・u	ノン-ダ	mをN(撥音)にする。-タが-ダになる。
r	切る kir・u	キッ-タ	tをQ(促音)にする。
w	買う ka(w)・u	カッ-タ	wをQ(促音)にする。

《形容詞・形容名詞述語・名詞述語》

		赤い	静か(だ)	学生[ガクセー](だ)
終 止 類	断定非過去	アケア	シジカダ	学生ダ
	断定過去	アケアカッタ アケアケ	シジカデアッタ	学生デアッタ
	推量	アケアデロ	シジカダデロ	学生ダデロ
接 続 類	連体非過去	アケア	シジカダ シジカナ	学生ダ 《学生ノ》
	連体過去	アケアカッタ	シジカデアッタ	学生デアッタ
	中止	アケアクテ	シジカデ	学生デ
	仮定	アケアバ	シジカダバ シジカナバ	学生ダバ 学生ナバ
派 生 類	否定	アケアクネア	シジカデネア	学生デネア
	なる	アケアクナル	シジカ(ニ)ナル	学生(ニ)ナル
	丁寧	アケアシ アケアガンシ	シジカダシ シジカデガンシ シジカデアンシ	学生ダシ 学校デガンシ 学校デアンシ
	のだ	アケアンダ アケアナダ	シジカダンダ シジカダナダ	学校ダンダ 学生ダナダ

1. 動詞の活用の特徴

(1) 活用型と語類の対応

a 類動詞(五段動詞)は 型、b 類動詞(一段動詞)は 型と 型 r、「来る」は 型 k と 型 r、「する」は 型 s と 型 r の活用形をもつ。

b 類動詞「見る」の 型 r の形式のうち、共通語と異なるのは、命令形(ミレ)、意志形(ミロ(一))、使役形(ミラセル)である。またこの方言には自発形(ミラル)があり、型 r の形式となる。以上の点で、b 類動詞の 型 r 化は共通語よりも進んでいる。

「来る」は、命令形が「コエ」、仮定形(バ形)が

「コエバ」となる。「コエ」が縮約した「ケ」(命令形)・「ケバ」(仮定形)も使用される。意志形の「コロ(一)」は、型 r の形式である。

「する」は、断定過去形(シタ)・テ形(シテ)だけでなく、断定非過去形(シ)、命令形(シエ)、意志形(ソ(一))、仮定形(シエバ)、否定形(サネア)等にも 型 s の活用形をもち、活用体系全体が 型 s 化(サ行五段化)を果たしている。一方、意志形で併用されている「シロ(一)」は、型 r の形式となっている。なお、表中の断定非過去形「シル」「シ」は、この方言が「シ/ス」の区別をもたないことにより便宜的に「シ」で表記しているものであり、「する」

の断定非過去形がイ段形と機能的に等価であるということではない。

(2)各活用形の特徴

〈断定非過去形・連体非過去形〉

断定非過去形、連体非過去形は同形で、「書く」「見る」「来る」「する」は、ウ段形の「カク」「ミル」「クル」「シル・シ」となる。「する」に「シ」という型s化した形が現れる(「シ」は表記の上ではイ段形だが、この方言が「シ/ス」の区別をもたないことにより便宜的に「シ」で表記しているものであり、ウ段形相当形式である)。

この方言の断定非過去形には、共通語では意志形が用いられる以下のような用法がある。

- ・「七回忌だとも 身内だけで さっと やるど おもって。」(七回忌だけれども身内だけで簡素にやろうと思って。)(本荘b・「さっと」)

〈断定過去形・連体過去形〉

断定過去形、連体過去形は同形で、a 類動詞では基幹音便形、b 類動詞では 型基幹 (= 語幹)、「来る」「する」では 型k・sイ段形に「タ」を後接した形となる。

〈命令形〉

b 類動詞「見る」の命令形は「ミレ」であり 型rの形式をとる。

- ・「じっこ、戸、あげれであ。」(じいさん、戸を開けるよ。)(秋田・「木っこりじっこ」)

「来る」の命令形は、「コエ」が優勢だが「コエ」の縮約形の「ケ」も使用される。

- ・「忙しみにえたら あしびにこえ。」(忙しさがとれたら、遊びに来い。)(本荘a・「いそがしみ」)
- ・「おもしろかったなあ。こんだ、また、あそびに来る。じっこ、また、あしたもけえなあ。」(おもしろかったなあ。今度また遊びに来る。じいさん、また、明日も来いよ。)(秋田・「木っこりじっこ」)

「する」の命令形は「シェ」である。型r化した「シレ」から sire > sie > sje のような変化によって生じたものと思われるが、「シェ」はこの方言では「セ」の異音であることから、結果的に 型sの形式となっている。

〈禁止形〉

禁止形は、ウ段形に「ナ」を後接した形で表される。「乗る」「見る」「来る」「する」のように、ウ段形語尾が「ル」であるものは「ル」が撥音化し、「ノンナ」「ミンナ」「クンナ」「シンナ」という形になる。

- ・「すねんなや いでねが。」(つねるなよ。痛いじゃないか。)(本荘a・「すねる」)

〈意志形〉

b 類動詞と「来る」「する」の意志形が、「ミロ(ー)」「コロ(ー)」「シロ(ー)」のように 型rの形式になる。「する」では 型s化した「ソ(ー)」の形も併用される。意志形は勧誘表現でも用いられる。

- ・「わだしたも 何が人のやぐたづごど そでえな。」(私たちも何か人の役に立つことをしようよ。)(本荘a・「そでえ」)

意志形には、終助詞「バヤ」を後接して反語を表す表現がある。「カコバヤ」は「書くものか」、すなわち「書かない」の意味である。

- ・おれ、そなた手紙書ごばや。(私がそんな手紙を書くものか。)
- ・「わ ゆわえだごど やりころばして 俺さもてきたて なじょ されろばや。」(自分が言われたことを途中で匙を投げて俺のところに持ってきたって、どうすることもできないよ。)(本荘b・「やりころばす」)

「する」では「シロバヤ」も可能ではあるが、「ソバヤ」の方が普通の表現のようである。

- ・そなたごどそばや。(そんなことをするものか。)

反語の「バヤ」は、状態性の述語の意志形にも後接する。

- ・あの人 おじだど そなたごど あるばや。」(あの人が落選したって、そんなことあるはずがない。)(本荘b・「あるばや」)
- ・「知らねあふりして えらえろばや。」(知らない振りしていられようか、いやいられない。)(本荘b・「えらえろばや」)

〈推量形〉

東北地方の方言は全般的に、推量を表す形式として「ベ(ペ)」「カクベ」「ミルベ・ミッペ」などを用いる。一方、この方言では、「デロ」が用いられる。「デロ」は、断定形に後接する。

- ・「しえっきり 遊べば ねぷてぐ なるでろ。」

(精一杯遊ぶと眠くなるだろう。)(本荘b・「しえっきり・せっきり」)

・「んだがら なんども ゆたでる。」(だから何度もいったでしょう。)(本荘b・「んだがら」)

由利方言域の中では、本荘方言を含む沿岸部の方言で「デロ」が用いられ、山間部(旧東由利町・旧矢島町・旧島海町)の方言では「カロ」が用いられる。

〈中止形〉

中止形は、「テ」によって表される。「テ」はa類動詞では基幹音便形、b類動詞では 型基幹、「来る」「する」ではイ段形「キ」「シ」に後接する。

〈仮定形〉

仮定形は、エ段形に「バ」を後接した形になる。「来る」の仮定形は、「コエバ」が優勢だが、「コエバ」の縮約形の「ケバ」も使用される。「する」の仮定形は「シェバ」となる。

後件が要求表現等働きかけの強い文タイプになる場合の予測的条件文には、「タラ」が用いられる。「タラ」は、a類動詞では基幹音便形、b類動詞では 型基幹(=語幹)「来る」「する」では 型イ段形に後接する。「タラ」は、事実的条件文にも用いられる。

- ・はえぐ{こえば/ ?きたら}会える。〔予測的条件文・後件が叙述文〕
- ・まま{ xくえば/ かつたら}歯みがけ。〔予測的条件文・後件が命令文〕
- ・10時に{ xえげば/ えつたら}おわってだ。〔事実的条件文〕

〈継起形〉

事実的条件文の専用形式として、「タバ」{タツケ}が用いられる。「タバ」「タツケ」は、a類動詞では基幹音便形、b類動詞では 型基幹、「来る」「する」ではイ段形「キ」「シ」に後接する。

・10時に{えつたば/ えつたつけ}おわってだ。

〈否定形〉

「カカネア」「ミネア」「コネア」「サネア」など。「する」の否定形「サネア」は 型s化(サ行五段化)した形である。否定形自体は、基本的に形容詞型の活用をする。

・「あの人は 何考えてるあだが ばさつとさねあ。」(あの人が何を考えているのか、はっきりしない。)(本荘b・「ばさつとさねあ」)

〈丁寧形〉

動詞の丁寧形には、断定形に「シ」を後接した形のほかに、「アンシ」という形がある。これは城下町の古い上品なことばとされ、現在はほとんど使用されていない。「アンシ」は、a類動詞および「来る」「する」ではイ段形、b類動詞では 型基幹に接続する。

・「はやぐ買わねば 無くなりあんすで。」(早く買わなければ無くなりますよ。)(本荘a・「あんすで」)

〈使役形〉

「カカシエル」「ミサシエル」「コサシエル」「サシエル」など。b類動詞と「来る」は 型r化した「ミラシエル」「コラシエル」となる場合がある。使役形自体は、b類動詞と同様の活用型をとる。

・「やだってゆつたのに ぐりっぐりど引き受けらしえらえでしまった。」(嫌だと言ったのに、強引に引き受けさせられてしまった。)(本荘a・「ぐりっぐりど」)

〈受身形〉

「カカレル」「ミラレル」「コラレル」「サレル」のrが脱落した「カカエル」「ミラエル」「コラエル」「サエル」が用いられることが多い。受身形自体は、b類動詞と同様の活用型をとる。

・「歯いでも 医者さえぐな おもやみだ。いでぐさえるほが なげぐ待だしえらえるおの。」(歯が痛いけど、医者へ行くのが億劫だ。痛くされるほか、長く待たせられるもの。)(本荘a・「おもやみ」)

〈可能(肯定・否定)形〉

能力可能と状況可能の形式の区別がある。

		能力可能	状況可能
書く	肯定	カケル	カク(二)エー
	否定	カケネア	カカエネア
見る	肯定	ミレル	ミル(二)エー
	否定	ミレネア	ミラエネア

能力可能は肯定・否定とも、a類動詞、b類動詞の型r、「来る」の型r(kor)「する」の型sのエ段形に「ル」を後接した形で表される。

状況可能肯定形に用いられる「(二)エー」は、ウ段形(断定非過去形)に接続する。

・あした{くるにえ/くるえ}が。(明日来れるか。)

・「味噌で味付けしておけば すぐ食べるにえくて えおな。」(味噌で味付けをしておく、すぐに食べることができていいよね。)(本荘 a・「はる」)

状況可能否定形は、受身形の否定形と同形である。受身形と同様に r が脱落する形が用いられることが多い。

・「猿が雉のところに米をよこせと言ってやって来て」雉「んた。やらえね。」(いやだ。やれない。)(秋田・「さるーば きじーば」)

〈自発形〉

この方言には生産的な自発形がある。「カカル」「ミラル」「コラル」「サル」など、型 r の形式になる。自発形自体は、a 類動詞と同様の活用型をとる。

- ・このペン、スラスラ書がる。(このペンはスラスラと書ける。)
- ・このペン、書がらね。(このペンは書けない。)
- ・明るくなったので、じっこ、行ったあどで見れば、木あ、いっぺえ切らって、積まってだけど。(明るくなったので、じいさんは、[動物たちが]去って行った後で見たら、木がいっぱい切られていて、積まれていたそうだ。)(秋田・「木っこりじっこ」)

〈尊敬形〉

生産的な尊敬形式を持たない。敬語の使用自体が活発ではない。

〈継続形〉

継続形は「ている」に由来する「テル」を用いる。「テル」は a 類動詞では基幹音便形、b 類動詞では型基幹、「来る」「する」ではイ段形「キ」「シ」に接続する。この方言の継続形は、現在時制を表す場合に、「テル」の過去形の「テタ」が用いられる点に特徴がある。

- ・いっしょうけんめい切っただうち、暗くなっちゃったでおの。(一生懸命切っているうちに、暗くなっちゃったということだもの。)(秋田・「木っこりじっこ」)

「テル」の過去形「テタ」の「テ」は促音化することが多い。b 類動詞「見ていた」は「ミッタ」、来ていたは「キッタ」、していたは「シッタ」と

なる。

- ・「俺、面はめったば、助けでけれどって、騒いで(後略)」(俺が[鬼の]面をはめていたら、[それを見た女が]助けてくれと言って、騒いで)(本荘 b・「一つ覚え」)

a 類動詞では「テ(デ)」が促音化し、さらにその促音が短く発音される場合がある。

書いていた：カエテタ>カエッタ>カエタ

嗅いでいた：カエデダ>カエッダ>カエダ

出していた：ダシテタ>ダシッタ>ダシタ

立っていた：タツテタ>タツタ

死んでいた：シンデタ>シンッダ>シンダ

飛んでいた：トンデタ>トンッダ>トンダ

飲んでいた：ノンデタ>ノンッダ>ノンダ

切っていた：キツテタ>キツタ

買っていた：カツテタ>カツタ

結果的に、非継続形の過去形と継続形の過去形は、a 類動詞においては同形になる。

〈希望形〉

希望形は「たい」に由来する「テア」を用いる。「テア」は、a 類動詞・「来る」「する」ではイ段形、b 類動詞では型基幹に接続する。「テア」自体は形容詞型の活用をする。

- ・「おっさん、おっさん。おら、くりこひろいに行ぎであ。行がひでけれ。」(和尚さん、和尚さん、おれ、栗を拾いに行きたい。行かせてくれ。)(秋田・「三枚のふだ」)

〈のだ形〉

「のだ」に相当する形式として「ンダ」「ナダ」を用いる。連体形に接続する。

- ・ある年の秋の終わりごろ、ある家でも七十才のばっちゃんを、親捨て場さ捨ててに行くことになったんだと。(ある年の秋の終わりごろ、ある家でも七十才のおばあさんを親捨て場に捨ててに行くことになったんだそうだ。)(秋田・「親捨て場」)
- ・「なんたふうにして、つるなだ。」(どんなふうにして釣るのだ。)(秋田・「かわうそときつね」)

2. 形容詞・形容名詞述語・名詞述語の活用の特徴
【形容詞】

〈断定非過去形・連体非過去形〉

共通語の形容詞は、「暗い」「優しい」「安い」「白い」など、イ語尾で終わるが、本荘方言の形容詞は、語尾と前接母音とが融合した形が非過去形となる。すなわち、「暗い」であれば「クレア(ー)」、「優しい」であれば「ヤサシ(ー)」、「安い」であれば「ヤシ(ー)」、「白い」であれば「シレ(ー)」となる。この非過去形はこのままの形で語幹相当の形式となり、さまざまな語尾を後接する。

断定非過去形と連体非過去形は同形で、以下のよう
に用いられる。

- ・外、くれあ。(外が暗い。)
- ・くれあどごで本読むな。(暗い所で本を読むな。)

〈断定過去形・連体過去形〉

形容詞の断定過去形は、語幹(非過去形と同形)に「カッタ」を後接した形と「ケ」を後接した形がある。

- ・外、{くれあがった/くれあけ}(外が暗かった。)

連体過去形は、「カッタ」の形のみが用いられる。

- ・さきたまで{くれあがった/xくれあけ}部屋さ電気ちーだ。(さきほどまで暗かった部屋に電気がついた。)

〈推量形〉

動詞と同様に、推量形として「～デロ」が用いられる。「デロ」は、断定形に後接する。

- ・「それだば、このなわを持って帰ってもえでる。」(それなら、この縄を持って帰ってもいいだろう。)(秋田・「親捨て場」)

- ・外、くれあがったでる。(外は暗かっただろう。)

〈中止形〉

語幹(非過去形と同形)に「クテ」を後接した形になる。

- ・夜道くれあくて、おっかねあ。(夜道が暗くて怖い。)

〈仮定形〉

語幹(非過去形と同形)に「バ」を後接した形になる。

- ・くれあば電気ちけれ。(暗ければ電気をつける。)

〈否定形〉

語幹(非過去形と同形)に「ク」をつけ「ネア」を後接した形になる。

- ・まだくれあぐねあ。(まだ暗くない。)

〈なる形〉

語幹(非過去形と同形)に「ク」をつけ「ナル」を後接した形になる。

- ・「あぎなば ひみじけて すぐ うすくれぐなる。」(秋だと日が短くて、すぐに薄暗くなる。)(本荘 b・「うすくれ」)

〈丁寧形〉

形容詞の丁寧形には、断定形に「シ」を後接した形のほかに、「ガンシ」という形がある。これは城下町の古い上品なことばとされ、現在はほとんど使用されていない。

- ・「あんたばっこで しょしがんす。」(あんな少しばかりで恥ずかしいです。)(本荘 a・「あんたばっこ・あんたばり・あえんたばり」)

〈のだ形〉

連体形に「ンダ」「ナダ」を後接した形になる。

- ・まだくれあ{んだ/なだ}(まだ暗いのだ。)
- ・夜道くれあがった{んだ/なだ}(夜道が暗かったのだ。)

【形容名詞述語・名詞述語】

〈断定非過去形・連体非過去形〉

形容名詞述語、名詞述語とも断定非過去形は形容名詞・名詞に「ダ」がつく形になる。

- ・この部屋なば静がだ。(この部屋は静かだ。)
- ・太郎なば学生だ。(太郎は学生だ。)

形容名詞述語の連体非過去形は「ダ」の形と「ナ」の形が併用される。

- ・{静がだ/静がな}部屋さ行ご。(静かな部屋へ行こう。)

- ・「あんまり おがしげえだ 格好して 歩くなて。」(あんまり変な格好して歩くなて。)

(本荘 b・「おがしだ・おがしげえだ・おがしげえんだ」)

- ・おそくなて、夜になつたば、何か来たようだ音するでおの。(遅くなって夜になったら、何か来たような音がするというもの。)(秋田・「木っこりじっこ」)

名詞述語の連体非過去形においても「ダ」の形が用いられる。

- ・学生だ人(学生である人)

ただし、名詞の連体格では助詞「ノ」が用いられる。

- ・その学生の本(その学生の本)

〈断定過去形・連体過去形〉

形容名詞述語、名詞述語の断定過去形・連体過去形は同形で、「デアッタ」の形をとる。

- ・あの部屋なば静がであった。(あの部屋は静かだった。)
- ・さきたまで静がであった部屋。(さきまで静かだった部屋。)
- ・太郎なば学生であった。(太郎は学生だった。)
- ・学生であった人。(学生だった人。)

〈推量形〉

動詞・形容詞と同様に、推量形として「～デロ」が用いられる。「デロ」は、形容名詞述語、名詞述語においても断定形に後接する。

- ・あの部屋なば静がだでろ。(あの部屋は静かだろう。)
- ・あの部屋なば静かであったでろ。(あの部屋は静かだっただろう。)
- ・「山のほう あつがり かじだでろが。」(山のほうが明るい、火事だろうか。)(本荘b・「あつがり」)
- ・太郎なば学生であったでろ。(太郎は学生だっただろう。)

〈中止形〉

「デ」を後接した形になる。

- ・この部屋なば静がで、さびしねあ。(この部屋は静かでさびしい。)
- ・太郎なば学生で、一人暮らした。(太郎は学生で一人暮らした。)

〈仮定形〉

「ダバ」「ナバ」が後接した形になる。

- ・あの部屋が静が{だば/なば}行きであ。(あの部屋が静かなら行きたい。)
- ・学生{だば/なば}やしくなる。(学生なら安くなる。)

〈否定形〉

「デネア」を後接した形になる。

- ・この部屋なば静がでねあ。(この部屋は静かではない。)
- ・太郎なば学生でねあ。(太郎は学生ではない。)

〈なる形〉

「ニナル」を後接した形になる。名詞では「ニ」が省略されることが多い。

- ・「あえびゃんしえば じょんずになる。」(ああいうようにやると、うまくなる。)(本荘b・「あえびゃん」)
- ・「子供だ あしびほろけて ひるまなても けてこねあ。」(子供達が遊びに夢中になって昼になっても帰って来ない。)(本荘b・「あしびほろける」)

〈丁寧形〉

形容名詞述語・名詞述語の丁寧形には、断定形に「シ」を後接した形のほかに、「デガンシ」「デアンシ」という形がある。これは城下町の古い上品なことばとされ、現在はほとんど使用されていない。

- ・「まんつまんつ、ひやしぶりでがんすごど。おまめであんしたが?」(まあまあ、久しぶりでございますこと。お元気でございましたか。)(本荘a・「あき」)

〈のだ形〉

連体形に「ンダ」を後接した形になる。「ナダ」を後接する形はあまり用いられない。

- ・んだんだど。(そうなんだって。)(本荘b・「んだんだど」)

用例出典

秋田：秋田県国語教育研究会・秋田県学校図書館協議会編(2004)『読みがたり 秋田のむかし話』日本標準

本荘a：佐藤勵子(1988)『本荘の話しことば』私家版

本荘b：本荘市教育委員会編(2004)『本荘由利のことばっこ』秋田文化出版

参考文献

秋田県教育委員会編(2000)『秋田のことば』無明舎出版

佐藤稔(1982)『秋田県の方言』講座方言学 7 北海道・東北地方の方言 国書刊行会

本荘市教育委員会編(2004)『本荘由利のことばっこ』秋田文化出版

(日高水穂)